

特集・市民と生涯学習③

実感的生涯学習論

水野彰雄

一——はじめに

朝日カルチャーセンターは今年、開設十五周年である。私が所属する朝日カルチャーセンター・横浜もこの春、十周年になる。もともとくわしくは、一九七四年四月、東京・新宿の超高層ビルの一つ住友ビル内にオープンし、スタートした。その後七九年に横浜朝日会館に、さらに八一年四月から横浜駅東口の横浜ルミネに進出し、朝日カルチャーセンター・横浜となった。八七年四月からは藤沢駅北口の藤沢ルミネにも朝日カルチャーセンター・湘南が開設された。教室・講座の規模は、東京が三十教室、五百五十科目、横浜が二十教室、四百科目、湘南が

七教室、百五十科目、八九年二月現在、この三センターで六万五千人の会員数である。このほか、札幌、立川、名古屋、大阪、京都、神戸、芦屋、岡山、北九州など全国十三カ所にあり、ネットワークを組んでいる。

歴史的にも規模のうえからも生涯学習時代のパイオニアということになるが、そもそもは、ポール・ラングランがユネスコで提唱した生涯教育の理念を民間事業で推進しようと、朝日新聞の文化事業の一環として始められたもの。私事になるが、当時学芸部記者で、先輩が開設準備室入りしたこともあって、講座や講師に関してアイデアを求められたりした。七八年、大阪にも開設されたさい、たまたま大阪在勤中であ

- 一——はじめに
- 二——講座編成について
- 三——問題の先取り
- 四——手づくりの学習環境

り、ここでも講座企画など少しばかりコミットした。そんなこんなで、無関心ではいられなかったのだが、後年、真つ正面から取り組むことになろうとは考えていなかった。

そしていま——。いわく多様化、情報化、高齢化、国際化、技術革新の、そんな今日の時代の要請、社会の要請に応える生涯学習をどう実現していくか。目下、悪戦苦闘中という次第である。

二——講座編成について

時代の要請、社会の要請といったが、その対応は、何よりもまず、どのような講座を編成し、

展開していくかにかかっている。いろんな考
え方ができるだろうが、私たちは、次の諸点を
講座編成の基本的な柱としている。

- ① 真理の探求
- ② 日本の伝統文化の尊重
- ③ 現代社会への積極的対応
- ④ 語学力の向上と国際的視野の拡大
- ⑤ 創作・創造活動への参加
- ⑥ スポーツなどを通しての健康増進

また全講座を大要次のようなコースに分けて
いる。

- 人間を考えるコース
- 心とからだのコース
- 日本を考えるコース
- 外国を知るコース
- 文学コース
- コミュニケーションコース
- 暮らしのコース
- 自然科学コース
- 社会福祉・ボランティアコース
- 法律・経済・ビジネスコース
- 棋道コース
- 語学コース
- 美術コース
- 書道コース
- 手芸・工芸・服飾コース

生け花・茶道・香道コース
音楽・演劇・舞踊コース
健康コース

人間を考えるコースとは哲学、思想、宗教な
どで、横浜の四月講座でいうと、「現代思想の
系譜」「プラトンを読む」「シュタイナー教育を
学ぶ」「仏教を現代に問う」「現代キリスト教問
答」ほか。心とからだのコースは、「カウンセセ
リング」「ユングからみた禅」などの心理学関係、
「自律訓練法」といったものもここに含まれる。
「議会百年史」「歴史の中の天皇」「大和の古墳
を考える」「日本書紀を読む」「古文書に親しむ」
「昭和現代史を見直す」といった歴史関連が日
本を考えるコースである。コミュニケーション
コースは「朗読の魅力をさぐる」「マスコミ文
章の書き方」「ボイストレーニング」もこのコー
スに入っている。また文学コースは、俳句、短
歌、詩、小説、シナリオ、童話などの実作から
源氏、平家、万葉ほかの古典から近現代文学ま
で盛り沢山だ。漢詩、漢文の講座もある。

語学は英、仏、独、伊、露語をはじめ、スベ
イン語、中国語、朝鮮語、アラビア語、タイ語
など各国語に及び、美術コースも油絵、日本画
はもちろん、水彩、水墨、テンペラ、木版、銅
版画、リトグラフ、能面、仏像彫刻ほか各ジャン
ルにわたっている。手芸・工芸・服飾コース

も五十科目にのぼる。

ここではほんの一部しか紹介できなかつた
が、このように講座は多岐にわたり、かつ総合
的な編成で、多様化がすすむ学習ニーズに対応
しているわけだ。特に、哲学、心理学、歴史、
法律、経済、思想など、いわゆる教養講座が量
的にも質的にも高水準を保って常設されている
のが特徴といえよう。

赴任後初めての編成期を終え、できあがった
パンフレットにざらりと並ぶ講座群、講師陣に
圧倒される思いがしたことが思い返されてく
る。

講座編成は、年四回行われる。四月六月、七
ー九月、十一月、一―三月のサイクルであ
る。継続していく常設講座のほかに毎期、新た
に登場させる講座は、全部門におよぶが、とり
わけ教養部門に多い。新しくスタートする講座、
この期のみの新講座、一回ないし数回の短期特
別講座などである。これらの新講座は、いつて
みればその期の「顔」ともなり得るだけにスタッ
フの力の入れ方、苦心もひと通りではない。企
画にはじまって講師の交渉、パンフレット、リー
フレットのための原稿づくり、そして開講準備
のいろいろ。平常の講座運営と並行して行うの
である。

いつでもだれでも受講できる。単位の取得な

どに拘束されない、いわば開かれた、柔軟な講座展開が民間カルチャーセンターの特色である。そこに、講座企画、講座づくりの妙味もあるのだが。逆にそれはむしろさでもあろう。アイデアの勝負ということでもある。またたとえば、一つのテーマを各分野の複数講師によって構成する講座、学際的な講師陣という点でも他にない魅力なのだが、スタッフには諸先生の日程調整一つとっても並大抵ではない。

そして、何とについても、苦心の講座に受講者がどう反応するか。これが大問題である。

三——問題の先取り

受講者の反応といったが、講座の実例を紹介しよう。それは、とりも直さず、講座が社会の変化、学習ニーズにどう対応するかを語ることになるうからである。部門によって、かなりの相違はあるが、ここでは教養部門について述べる。

「死について」という講座があった。八五年四月の東京の講座である。①死をいかに迎えるか 門脇佳吉・上智大教授②死との交わりかた 山折哲雄・国立歴史民俗博物館教授③死を前にした人々とともに 原義雄・聖隷ホスピス所長④自分自身の死をまっとうする アルフォン

ス・デーケン・上智大教授⑤生と死のあいだ 早良康明・駒沢大教授⑥老いと死の受容 井上祥治・カトリック司祭⑦禪と死 鈴木格禪・駒沢大教授⑧死について 押田成人・哲学者といったラインアップである。

タブーとされている死の問題をずばり、講座として登場させるのは、宗教系の大学などではあったろうが、一般にはこの時点では恐らく珍しいことであつたらう。が、この講座は予想を超えた反響を呼び、つづいて次には「死の準備教育」という講座を生み、大ヒットとなったのだ。講座カセットも作られたが、これも着実な売れ行きをみせた。横浜でも八七年四月の講座で「死を考える」を組み、作家加賀乙彦氏、上智大教授霜山徳爾氏ほかの講師陣で、多くの受講者をあつめた。

このころだつたらうか。月刊誌「新潮45」で「死ぬための生き方」など、毎号のように、死に関する特集が生まれ、その他の雑誌でもいまや、欠かせぬテーマになっていく。死の問題を扱った単行本、図書も数多く出ており、叢書「死の文化」全十五巻の刊行も始まった。

高齢化社会にかかわる老いと死、脳死か心臓死か医の倫理問題といった「死」についての関心が高まりつつある。そんななかでいち早く反応し、タイミングよく、講座にのせたあたり、

問題の先取り、先見性という点で高く評価していい講座づくりだと私は思っている。

「現役人間時代に生きる女たち」。この講座は横浜で昨年十月、六回にわたって行われ好評を得た。①なぜいま現役人間時代なのか 吉武輝子・評論家②女の一人暮らし 吉沢久子・評論家③ひとすじに生きる 紀奈瀬衣織・女優④歌わない日はなかった 淡谷のり子⑤有夫恋 時実新子・川柳作家⑥こんなふう死にたい 佐藤愛子・作家という内容である。

次の世代の順番を奪うことなく、充実した老年期を生きるには、というテーマ。「現役」としてそれぞれの分野で活躍の老年期の方々に、その生き方を語っていたかどうかというもので、四月にも評論家秋山ちえ子、随筆家十返千鶴子、女優原泉ほかで開講され、好評をほくしたのだった。

とかく暗くなり勝ちな老人問題を人生の新しい旅立ちという明るい視点で切り込んだとりあげ方がアピールしたものであろう。五十歳代の女性が多かったのもこの問題の所在を物語っていた。特別に目新しいわけではないが、とりあげ方、切りこみよう次第で、新鮮な講座になるという好例として挙げた。

「わたしの風姿花伝」が横浜でこの一月から開講中。隔週九回講座で五月までつづく。能の

研究で知られる増田正造・武蔵野女子大教授、西野春雄・法政大教授を前後に、観世栄夫、友枝昭世、浅見眞州、金春信高、観世鏡之丞、山本順之、本田光洋各氏ら、現代の能楽界を代表する方々を招いて、世阿弥を語り、能の真髓を語っていただくという講座である。能に関する講座はこのところ人気講座の部類に入るが、なかで、こんど場合は出色。テーマの着想もいいが、実演者がこれだけそろっているのがユニーク。アイデアが実ってコクのある講座になった一例といえよう。さきにふれた複数講師の日程調整のむずかしさという点でも、これなど、その極みであろう。

問題の先取り、視点の新しさ、ユニークな着想——すべてではないが、どれも今日の講座づくりに必要な要素なのである。

四——手づくりの学習環境

今日の講座といえは、技術の進歩、知的関心の高度化の中で、リカレント学習といわれる職業連関の学習が必要を増し、その点からも講座の高度化、専門化が進むだろう。が、半面、というよりやはり、自己実現というか、生きがいのための学習の側面もますます要請されていくだろう。

先年の私どもの受講者調査で、その受講理由として「講座内容がよい」と並んで、「講師が魅力的」が圧倒的であり、また学習の成果として「交遊関係がひろがる」「尊敬する先生との出会い」「人生が楽しくなった」が目立っていた。知的欲求の充足、学ぶよろこびが学習の眼目

であるのはいうまでもなからうが、すばらしい先生と向きあい、同好の仲間を得る。それは活字でもテレビでも得られぬような、じかにふれあうあたかな味、したがって、血の通った、手づくりの学習環境が求められているわけだ。

「正法眼蔵を読む」二百回記念の集い、というパーティーが、昨年暮れの日、横浜の中華店が開かれた。講座「正法眼蔵を読む」の受講者たちが講師の古田紹欽先生を囲んで同窓会を行ったもので、卒業生や中退者も加わっていた。この難解な仏教書を学びつづけた学習意欲もさることながら、そこには先生と受講者とのふれあい、同学同好の仲間との交流の楽しさをにじませていた。

こうした人間関係、交流ということでは、講座が終わったあと、先生を囲み、あるいは仲間同士で食事やお茶のひとときを楽しむ風景がいつもみられ、また講座のあと、数時間にわたって論議を交わしている教室などもある。

万葉旅行というのがある。十年つづいている

小野寛・駒沢大教授の「万葉集の世界」「万葉集を読む」の受講者たちによる万葉ゆかりの地への旅行である。「大和路万葉の旅」にはじまり、筑紫、山陰路など。この春は「越中・能登の旅」が予定されているが、毎回四十余人が参加、交流、研究の実を挙げているのである。

生きがいということでは、最後に、学習成果をどう生かしていくか、の問題にふれておかねばなるまい。さきにあげた「死」や「現役人間時代」などのような講座によって考えを深めていくこと自体、大きな成果となり得るだろうし、社会的活動に発展させていくことも大切であろう。コーラスの教室の卒業生たちがコーラスグループを結成し、定期演奏会を行っている例、フォト教室のOBたちが同好研究会をつくって撮影会、作品展活動をつづけている例などがあり、またボランティア講座の人たちで手話や点訳など地域のボランティア活動を行っている人もある。

かつて東京の「小説の作法と鑑賞」の駒田教室（駒田信二・作家）から芥川賞作家重兼芳子さんが誕生しており、またこの賞では、横浜の教室でも受講者の多田尋子さんが最近二期にわたって有力候補になっているなど、その他の受賞の話題も大小さまざまが数多くある。

時代の要請、社会の要請に応えるためには、

企業としての組織整備、スタッフの育成、講座
編成・展開の体系化、それに公共の生涯教育機

関との補完のありかたなど、課題は多いが、と
もあれ、カルチャーセンターの役割と責任は、

これから強まるばかりのようである。

△朝日カルチャーセンター横浜支社長▽